

この手記は、令和5年6月に大峰山系行者還岳付近で遭難した男性によるものです。
男性は、当初大峰山系八経ヶ岳へ登山を計画していましたが、出発時間が遅れてしまったことから、急遽計画を変更して行者還岳への登山に向かいました。
男性は行者還岳山頂から下山途中に道に迷い、行程遅れによる焦りから岩場を下りる際に滑落し負傷した後、更に山中の深くに迷い込みました。
遭難2日目、男性の携帯電話が電波を捉え、110番通報する事ができ、救助隊が捜索に入りました。
天候は雨、現場は登山道から外れた山域で、捜索は難航しましたが、午後6時過ぎに救助隊が男性を発見することができました。
男性の負傷程度は深刻で、一刻を争う状況であったため、日没後の暗闇の中を担架に乗せて下山し救助したものです。

令和5年6月25日日曜日、この日は梅雨の曇天のつづくなかでの「晴れ」の日曜日でした。少し前から気候が登山に適したものとなってきました。私は心の中で大峰山系の日本百名山の八経ヶ岳への日帰り登山を考えていました。行者還西口登山口から八経ヶ岳へは朝早く、西口登山口から登山をはじめれば、お昼頃に山頂に到着し、西口駐車場には夕方16時頃には戻ってくれるだろうと思いました。6月下旬で日曜日しかもこの日は快晴なので、登山する人も多く、道に迷うことはないだろうと思いました。

ところが当日6月25日自宅で目を覚ましたのは、午前7時でした。出発の準備をすませ、自宅を出たのは午前8時になりました。そこで予定を変更して、八経ヶ岳の行程の半分の時間と距離の行者還岳の登頂に切り替えました。

自宅を出て行者還東口登山口へ到着したのはお昼前でした。鉄製の階段を通過して登山道にはいってゆきました。それまでの大峰奥駈道の尾根道では何組かの下山してくる登山客とすれちがいました。3人組の男女の登山者たちは、私とすれちがって、数分後に登山道を引き返してきて、心配そうに「大丈夫ですか、フラフラしているように見えます」と声をかけてきました。

思いおこせばご忠告をきいてここから登頂をやめて下山すれば何事もおこらなかったと思います。私はストックを持たずフラフラと歩いているように見えたのでしょうか。私としてはここで登山を中止して下山するという選択肢はなく、そのまま頂上をめざしました。

避難小屋からみる行者還岳は、大峰山系屈指の峻険なピークです。山頂までの難所は岩場です。岩場はきつく木組みのハシゴとロープがあり、ロープにつかまってよじのぼりました。この岩場から頂上まで岩場を越えて尾根道までたどりつくまでの登山道を憶えておけばよかったです。尾根道を歩いて頂上に着きました。15時頃だったと思います。すぐ先が断崖であることを確認してすぐ下山しました。よく覚えていませんでしたが、はじめの道標がありました。5分ほど歩きました。「→七曜岳」とあり、その下に「✓行者還避難小屋、弥山」と記されていました。私は「✓行者還避難小屋」の方に鋭角に下って行きました。この道標の前の笹の生い茂った道を「✓」方向に下って行きました。先に先ほどのロープと木のハシゴの岩場があるはずだと思いました。でもありませんでした。岩の崖になっているところに出てしまい「迷ったかな」と思いましたが、思えばそこから道を

引き返して道標にまで戻ればよかったと思います。私はそのあたりを横に移動して、おりられそうな岩場から両手両足をつかって岩場をおりました。

午後3時を過ぎていましたし、焦ったのです。私は岩場を両手両足をつかっておりはじめましたが、そのさいに手か足をあやまって岩場を滑落してしまいました。止まった時にはあお向けになっており、頭から血が流れていました。右背中をつよく打ったようです。そのときは打撲傷くらいだと思っていました。今滑った岩場をよじ登って道標にまで戻ればよかったのですが、その気になれませんでした。私は木の枝や幹をつかみながら下っていきました。登山道はみつきりませんでした。沢の音がきこえたので、沢にむかって下りていきました。沢までおりて沢沿いの道を行けばやがて林道に出られると勝手に考えていました。沢のあたりに道はありませんでした。沢をわたったり、ゴツゴツした川原の岩につかまりながら、水につかったりしながら沢を下りました。また、岩もすべりやすく転倒しましたので怪我の症状は悪化します。休憩のためすわってしまうと、しばらく立ち上がれませんでした。立ち上がったりで腰に激痛がありました。

18時頃になりあたりが暗くなり、これ以上沢を下ることはできません。携帯で緊急通報番号に電話しても電波は届きません。ほとんどねむれずに携帯で時間をみながらはやく夜があけないかということだけを願いつつ、寒く辛い一晚をすごしました。登山道をはなれた沢では電波はとどきません。

(翌26日)朝7時頃、ふと尾根の方をみると、登山者が2人こちらをみながら、何かヒソヒソと話しているようにも見えました。幻影だったのですが、この崖を登れば登山道に出るかもしれないと思い急な崖を登りはじめました。しかし、立ちあがる動作をするだけで激痛がします。木々の幹や枝そして根につかまりながら200メートルほど登って朝9時頃になりました。登山道はみつきりませんでした。5万分の1登山地図をみても、自分がいまどの辺にいるのかわかりませんでした。

9時すぎになって、携帯のメッセージの着信音がピンピンと鳴りました。立ち上がって携帯をみると、妻からのメッセージで音声電話も通じました。「登山道からはずれ道に迷って怪我をして動けなくなって至急たすけに来てほしい」と伝えました。しばらくして吉野警察からの着信がはいっており、「登山道からはずれて動けなくなっているのをたすけに来てほしい」とやっと伝えることができました。「110番に電話してもらわないとはっきりしたあなたの位置がわからない」といわれたので110番しました。

夕方の18時をまわっていたことでしょう。雨がポツリポツリと降っていたように思います。私は舌を出して雨水をひろいました。救助は今日はこないのではないかと思います。しばらく横になっていますと、「あっ、みつけました」と言ったのがきこえました。

そのとき救助隊が来てくれたことがわかりました。私はその場所で身うごきがとれない状態でした。助けにきていただいて、ほんとうに、うれしく思いました。こんな山奥まで担架をかついで、来ていただいたことに感謝しています。担架の四方をロープで引っ張っていただき、崖を下りたり沢を上ったりして林道に出て、救急車まで声をかけ合いながら丁寧に運んでいただきました。

病院に救急搬送されました。胸部肋骨3本と背骨がおれていました。右肘は4針の挫創でした。崖から滑落すると頭蓋骨や骨盤を骨折したりして、もっと重篤な場合もあるそうです。

山で道に迷ってわからなくなったら、勇気をもって元の道に戻りましょう。戻れなくても尾根をめざしましょう。沢を下ることは危険です。尾根で携帯の電波がとどくことはあります。入山するときは携帯のバッテリーはフル充電にしておきましょう。自分の位置を早く、知ってもらうために笛をもっていきましょう。山に出かけるときは家族のものに伝えておきましょう。詳しい山の名前は家族は分からない事がありますので、山の名前や場所はメモに書いて渡しておきましょう。登山届は出しましょう。登山口からは早朝出発、夕方三時頃行動終了を心がけましょう。最後になるべく一人で山に入るのはやめ、2人以上で山にはいるようにしましょう。

※本文は遭難者からの手記の一部を抜粋しています。